

「あまみエフエム ディ！ウェイヴ」放送原稿〈10月18日（金）放送分〉

テーマ「奄美群島12市町村の伝説・昔話」

あまみエフエム ディ！ウェイヴをお聞きの皆様、おはようございます。鹿児島県立奄美図書館です。今日は、毎月第3金曜日にお届けしている、奄美の伝説や昔話などを紹介する「奄美群島12市町村」シリーズの第7回目、龍郷町の昔話「金のフンをする猫の話」です。

昔、ある小さな村におじいさんとおばあさんが住んでいました。夫婦は斧一本で暮らしているような貧しい生活をしていました。

大晦日の夜に、おじいさんは山から切った薪^{たきぎ}を束ねて持ってきて、その薪を売りに村を回りましたが、買う人はいませんでした。おじいさんは仕方がないので薪を浜に持って行って、

「薪を作って村に売りに行きましたが、誰も買う人はいません。大晦日の夜に食べる米もないですが、ジョウゴの神様（海底にある浄土^{じょうど}『ねりや』の神様）、この薪を差し上げますから、どうぞ受けとってください。」と言って、その薪を海に^{ささ}捧げて家に帰りました。

おじいさんがちょうど家に帰り着いたころ、白髪^{はくはつ}の老人が家の前に現れました。その老人は、

「さっき、ジョウゴの神様に薪を捧げたのはお前か。」と言ったので、

「はい、私です。」とおじいさんが言うと、

「私はジョウゴの神の使いだが、さっきは本当にありがとう。神様への願^{がんだ}立てや願^{がんなお}直しのとき、お礼はいつも薪でもらっているのだが、あんなにたくさんの薪を一度にもらったので、もしお前が暮らしに困っているのなら、『ねりや』から金のフンをする猫を、お礼に持たせてやろう。その猫は物かげの人目につかない所に置いておき、一週間の間は何も食べさせてはいけない。その猫は物を食べない猫なのだ。」と老人は言いました。

「ありがとうございます。」とおじいさんが言うと、その老人はそのまま消えてしまいました。

その晩、かねては見たことのない黒猫がおじいさんの家にやってきました。おじいさんは、ああ、この黒猫が神様のくださった猫だなあと思いました。おじいさんは、老人が人目につかない所に猫を置いておくように言っていたことを思い出し、老人の言うとおりに猫を人目につかない場所に置いておきました。すると、猫はたちまち金色のフンをしました。そして七日が経つと、猫はいつの間にかいなくなりました。

おじいさんが猫を置いてあった場所を見ると、金色のフンがたくさんありました。おじいさんは、これが金というものかなあと思い、それを町へ持って行って人に見せたところ、

「これは本当の金なので、ぜひゆずってくれ。」と言われました。

それまで貧乏のどん底にあったおじいさんとおばあさんは、たちまち大金持ちになりました。

「今まで山で木を拾って生活していたのに、遊んで食べているのは、一体どういうわけだろう。」と隣の人がおじいさんに尋ねると、おじいさんは今までのことを全部隣の人に教えてあげました。

おじいさんの話を聞いた隣の方は、すぐに薪を三回も担^{かつ}いで行って浜に置きましたが、何も起こりませんでした。隣の方はまたおじいさんに、

「薪を三回も持っていったのに、何の音沙汰^{おとさた}もない。一体どうしたら猫が来たのか。」と尋ねました。

するとちょうど潮が満ちようとするときに、この前の老人が現れて、
「もうこれ以上の薪はいらない。ここに私が杖^{つえ}を立てておくので、そこから水が吹き出るはずだ。」と言って消えてしまいました。

老人が言ったように、その杖を立てていたところからは水が出るようになりました。隣の方はお金持ちにはなれませんでした。村の人々は遠くまで水をくみに行かなくてもすむようになり、豊かな暮らしができるようになったそうです。

さて、みなさんは「黒猫」というと何をイメージしますか。黒猫というだけでも不気味、不吉というマイナスイメージもあると思いますが、このように幸運や富を象徴する場合もあります。

また、海底の浄土『ねりや』から猫がやってくるところや、その猫が金のフンをするところも不思議です。

さきほどのお話のように、貧しい人が大晦日に良いことをして神様から宝を授かるというのは、いろいろな種類の昔話に見られますが、一年の最後に良いことをすると幸福が訪れますよ、という昔からの教えなのかもしれません。

このように奄美図書館には、面白いお話を紹介した本がたくさんあります。ぜひ図書館にいらして、いろいろな本を手にとってほしいと思います。職員一同、みなさまのご来館を心よりお待ちしております。

以上、鹿児島県立奄美図書館でした。